

# 國學院大學學術情報リポジトリ

澁澤龍彦「髑髏盃」における<鎌倉>：  
怪異の発生と場所のアイデンティティ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-12 キーワード (Ja): 澁澤龍彦, 鎌倉, 典拠, 怪異, 場所のアイデンティティ キーワード (En): 作成者: アンザイ, シンジ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000139">https://doi.org/10.57529/0002000139</a>

# 澁澤龍彦「髑髏盃」における〈鎌倉〉

— 怪異の発生と場所のアイデンティティ —

安西晋二

キーワード

澁澤龍彦 鎌倉 典拠 怪異 場所のアイデンティティ

## 要旨

澁澤龍彦の小説「髑髏盃」(「海燕」一九八五年七月)において、小説内の〈鎌倉〉がどのように描かれているかを検討した。「髑髏盃」は、一七五七(宝暦七)年に没した盲目の漢詩人・高野蘭亭の逸話を題材としている。小説内の蘭亭は、巨福呂坂切通、鶴岡八幡宮、若宮大路を経て、由比ヶ浜方面へと向かい、極楽寺にいたるといふ現代の鎌倉観光でも中心的なエリアを移動する。小説が発表された一九八〇年代であれば、メディアを通じて、誰にでも知られるようになる観光スポットを通過していくのである。

わかりやすいエリアが利用されながらも、語られる内容は、「天狗つぶて」などの宝暦期の怪異となる。極楽寺にあるという大館次郎宗氏の墓を蘭亭が暴き、その髑髏で酒盃を作るエピソードは百井塘雨『笈埃随筆』や『新編相模国風土記稿』等を典拠としている。

複数の典拠と情報の重ね合わせによって、「鬮髑盃」の〈鎌倉〉は場所に特異な歴史と事物を際立たせている。そこで発生する怪異の起点となる大館次郎宗氏の墓は、極楽寺内の「谷倉」にあるとされる。「やぐら」は中世期の鎌倉に固有の墳墓であり、現代にいたるまで怪談の舞台にもなり続けてきた。「やぐら」から始まる怪異の発生は、典拠利用と同じく鎌倉という場所の必然性を前景化させるとともに、現代の怪談文脈へも「鬮髑盃」の読みを開いていく。「鬮髑盃」の〈鎌倉〉は、現実的かつ「現在」的な鎌倉と完全に乖離しているのではなく、読まれる時代を問わない現在性を担保しつつ書き換えられているのである。また、「鬮髑盃」の〈鎌倉〉は、エドワード・レルフのいう「部内者」<sup>1)</sup>による場所のアイデンティティを中心に描かれているといえる。場所の内部的な経験者を通じて、その場所に固有の歴史・文化・怪異が連環しながら語られる。それにより、「鬮髑盃」の〈鎌倉〉は、現在の認知が意識された拡張的な場所として成立していると考えられるのである。

## 一、澁澤龍彦と鎌倉

一九四六年、澁澤龍彦は家族とともに東京から鎌倉に移り住んだ。以降、鎌倉に住み続けた澁澤にとって、この地は特別な場所となる。澁澤は、数々のエッセイ等でも鎌倉を語り、後年は「きらら姫」「ダイダロス」「護法」「鬮髑盃」<sup>1)</sup>で小説の舞台にもした。

一九六六年から北鎌倉の新居に移った澁澤龍彦は、「三方を山に取り囲まれた、明月谷と呼ばれる谷戸の一角にある」自宅を愛し、「目を上げるとすぐ、緑の山が目飛びこんでくること」「春から夏、夏から秋にかけて、山の緑は微妙な変化を見せるが、それが机の前に坐ったまま、居ながらにして眺められる」ことを、「この上ない淨福」<sup>2)</sup>と述べている。自然とともにある静かな鎌倉が好まれていたようだ。一方で澁澤は、観光地として賑わう鎌倉には否定的な感情を抱いていた。とりわけ一九八〇年代には、観光とそれともない変化をしていった「現在」の鎌倉に対して不満と嫌悪が露骨に表されるようになる。<sup>3)</sup>にもかかわらず、北鎌倉や鶴岡八幡宮周辺、若宮大路から長谷寺あたりまでの、現代でも鎌倉観光の中心部ともいえるべき極めてわかりやすいエリアが、「護法」と「鬮髑盃」では舞台として設けられたのである。

もちろん、現実の鎌倉と、物語化された（鎌倉）は同一視できない。鎌倉の中心部を舞台にするとはいえ、「護法」は寛政、「髑髏盃」は宝暦を時代背景としている。近世期に時間が設定されることで、当然、「現在」とは大きく異なる（鎌倉）が現出する。また、「護法」は、「怪談をこのむ当時の世相」という作中のことばを受け、怪談めいた内容となり、同様の作風は「髑髏盃」にも共通している。特に「髑髏盃」は、澁澤龍彦の死後、種村季弘編『日本怪談集 上』（河出書房新社、一九八九・八）と遠藤周作編『それぞれの夜』（角川書店、一九九三・四）という、怪談のアンソロジーにも収録された。<sup>5)</sup>ただし、種村・遠藤ともに「髑髏盃」には直接言及をしていないため、両者がこの作品を怪談としてどう評価したかは定かではない。

宝暦期を時代背景としつつそこに怪異が加えられた「髑髏盃」は、小説発表当時の「現在」の鎌倉と一致しないような物語の空間ではあるだろう。作家自身の発言内容を顧みれば、現実の鎌倉を峻拒した怪談といえるのかもしれない。だが、このようにして時代を変え怪異とともに描かれる（鎌倉）からは、現実的な表徴は読み取れないと判断してもよいのだろうか。たとえば現代において、神沼三平太は、「鎌倉は、怪異の起る地でもある。狭い範囲に怪奇スポットが密集している」「風呂トイレ鎧武者付きと揶揄されるほど、武者の霊が出る土地」。怪談と日常が隣り合った土地<sup>5)</sup>という。二〇〇〇年以降の怪談文化をめぐる言説ではあるが、「武者の霊」とされる理由は鎌倉の歴史と深く関わっている。「髑髏盃」で発生する怪異も、『太平記』に準拠した史実を起点とする。古戦場でもあった鎌倉の歴史は怪異と切り離しがたく、場所自体が現代にいたるまで怪談文化と高い親和性を保持している。歴史と怪談という文脈によって、「髑髏盃」は現代の鎌倉という場所に開かれる読みを誘発する。たとえ作家自身が一九八〇年代当時の「現在」の鎌倉を嫌悪していたとしても、宝暦期を背景とする「髑髏盃」は、そういった現実的な場所の書き換え（あるいは差異と一致）を読み解く手がかりとなるだろう。

「髑髏盃」は、実在した近世期の盲目の漢詩人・高野蘭亭の死にまつわる物語である。小説内の高野蘭亭には典拠があり、かつそれに該当する書籍は『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』（国書刊行会、二〇〇六・一〇）以下、『蔵書目録』にも見られる。そしてその典拠には、蘭亭・鎌倉・怪異の関連性がすでに記されている。「髑髏盃」の（鎌倉）には、典拠を多用する澁澤龍彦の創作方法と、小説における場所をめぐる問題系が結び付いていると考えられるのである。そこで本稿では、「髑髏盃」のなかの（鎌倉）がどのように描かれているかを検討し、小説内で場所が虚構化されていく機構の析出を試みたい。

## 二、典拠の利用と鎌倉

まずは「髑髏盃」の梗概を簡単に確認しておきたい。作中、高野蘭亭は、酒を好み毒舌を弄し、酒盃の蒐集を趣味とする人物とされる。円覚寺のほとりの草堂で風雅一筋の生活を楽しむ蘭亭は、ある夜、同じく漢詩人である秋山玉山と彼の弟子が泊りがけで遊びに来ていた際、ふたりをともなつて極楽寺に向かう。そこに、大館次郎宗氏の墓があると睨んだ蘭亭は、それを暴き、その髑髏をもつて酒盃を作るという。極楽寺の山門まで来たところで蘭亭がこの話をする、突如「天狗つぶて」が起り、玉山は恐れ、墓暴きを止めるよう蘭亭に告げる。しかし蘭亭は、せせら笑い、ついに大館次郎宗氏の墓を暴いてしまう。その一年後の同月同日、蘭亭は、大館次郎宗氏の髑髏で作った盃で、女弟子の栄女にも酒を飲ませた。すると、栄女は倒れ、彼女の乱れた裾のなかから「小さな異様なもの」が現れ出て、蘭亭の足に噛みつく。激痛に苦しむ蘭亭が、朦朧とした状態で横たわっていると目の前に天狗が現れる。天狗は、蘭亭が失明する原因となった、日本橋小田原町の生家にあつた井戸を示し、「小座頭」との一件を蘭亭に思い出させる。天狗は、「みんな一度はここへ降りるのだからね」といい、蘭亭を背負い井戸の底へ沈んでいった。鎌倉の草堂では、ひっくり返って手足が膨れ上がって死んでいる蘭亭を、栄女が見つけた。語り手は、「大館次郎のたたり」か、「小座頭の怨念」か、蘭亭の死の原因は「なんともいえない」という。

高野蘭亭は、歴史上では宝暦七（一七五七）年七月六日没とされている。したがって、小説内の時間は一七五六年から一七五七年に蘭亭が死ぬまでの約一年となる。実在した蘭亭の死因は明らかではないため、「髑髏盃」は、蘭亭の死の、虚構化された「真相」を暗示的に語る物語ということになろう。

この蘭亭の造形（性格・性質）について小説内では、「わるい癖」があるとして「天性酒を好み、酔えば毒舌を弄し、相手かまわずばかり呼ばわりをする」「身辺に酒盃をあつめることを好んで、得意になってこれを見せびらかす。相手がいちいち感心してやらないと機嫌がわるい」ということが挙げられている。特に、酒盃の蒐集に対する蘭亭の拘泥は、大館次郎宗氏の墓暴きへといたる重要な動機となる。そして、大館次郎宗氏の髑髏へと蘭亭を駆り立てるきっかけとなったものが、栄女に読ませた「寛文のころ板行されたとおぼしい小瀬甫庵の『信長記』」である。作中では、栄女の音読という形で『信長記』の一節が引用されている。特に、「めずらしき肴あり、いま一献

あるべきとて、黒漆の箱出できた。何ならんとあやしみ見るところに、柴田修理亮勝家が呑みけるとき、みずから蓋をあけさせたもうに箔にて濃たる首三あり」という箇所は、「文中の「箔にて濃たる首」とは、漆を塗り金泥をかけた髑髏盃のことである」と語られ、「蘭亭の生きていた宝暦のころ、かならずしもそれは有名なはなしではなかった。このはなしに蘭亭がふかくころをうごかさされたとしても、それはそれとしてふしぎはなかったはずである」と、髑髏で作った酒盃に蘭亭が関心を示すエピソードとされた。

目黒将司は、小瀬甫庵の『信長記』において酒宴で信長が髑髏を披露する記述は「髑髏盃にしたわけではなく、あくまでも酒の肴として披露したという状況」であるため、「文中の「箔にて濃たる首」とは、漆を塗り金泥をかけた髑髏盃のことである」とする「髑髏盃」の語りは、『甫庵信長記』を作為的に読み替えたものである」と指摘している。<sup>(7)</sup>『信長記』に関しては、桑田忠親校注『改訂 信長公記』(新人物往来社、一九七六)と神郡周校注『信長記』上・下(現代思潮社、一九八一・九、一〇)の書名が『蔵書目録』中にも見られ、<sup>(8)</sup>澁澤がそれらを参照したであろうと推測される。たとえばこのうち、神郡周校注『信長記』上では「濃たる頸」に「首を漆で固め金泥で彩色したもの。薄濃(はくたみ)と云う」との注釈が付けられている。酒盃という語がない点に鑑みれば、目黒のいう「読み替え」にも見える。だが、ここは、おそらく典拠の存在が大きい。

目黒は、蘭亭を「慢心甚だしい人物」と記している、百井塘雨『笈埃随筆』卷之十二「雑説八十ヶ条 廿一」が「髑髏盃」の典拠だとしている。<sup>(9)</sup>『笈埃随筆』は『日本随筆大成』第二期第六卷(吉川弘文館、一九七四・六)に収載されており、これも『蔵書目録』に見られる。<sup>(10)</sup>『笈埃随筆』に記載された、高野蘭亭にまつわるエピソードは以下のとおりとなる。

相模國教恩寺に、中將重衡卿と千壽前と酒宴せし時の盃有り。大さ今の世の平皿のごとし。内外黒塗にして中に梅花の蒔繪あり。予東武にありし時、高野蘭亭といひしは盲人にて詩人なり。いかゞしてかこの盃を乞得て所持したり。因に云、此盲人髑髏盃を拵んとて、よのつねの人はおもしろからずとて、鎌倉にある大館次郎が塚をあばきけるに、忽ち晴天かき曇り、雷鳴雨夥しかりけるを、辛ふじて取て歸り、盃とし樂みけるに、其翌年其月其日に死したり。平人の塚すら猥にあばく事はあるべからず。ましてや勇士の靈何ぞ其儘に置べき。此もの元來盲人にて、詩作などする氣質ゆへ、慢心甚しき故にや。かゝる災ひにも逢へり。「中略」我朝にては織田信長公、浅井父子、浅倉義景を打亡し、其生首を盃にせしと云。此三人我等に大きに苦勞をかけしも、今はおもふまゝなりとて、柴田

勝家をはじめ、一座の大名に酒を賜ふ時、明智光秀のみ一人下戸なりしや。辭して飲ざるを、強て一盃を飲しめたりと云々。

蘭亭の性格・性質と、大館次郎宗氏の墓暴きおよび酒盃の作成といった『鬪體盃』の大筋が『笈埃隨筆』に基づくとする目黒の指摘は首肯できる。ただし、「其生首を盃にせし」という記述がすでに『笈埃隨筆』にある。とすれば、「鬪體盃」の「文中の「箔にて濃たる首」とは、漆を塗り金泥をかけた鬪體盃のことである」という一節は、『笈埃隨筆』を元にした言説であろう。「鬪體盃」は、「有名なはなしではなかった」逸話を知り、鬪體で作った酒盃に「ふかくころをうごかされた」蘭亭を浮上させているのだから、「箔にて濃たる首」は盃であると解釈されねばなるまい。物語の構成における要所でもある。蘭亭は、「野心勃勃たる酒盃コレクター」とされ、鬪體の酒盃に対して「いかなる代価をはらってもこれを手に入れたいと執念を燃やすていの男だった」とも語られている。小説の最後に蘭亭は、その命を代価に払う。このような蘭亭の造形・伏線と、「箔にて濃たる首」とは、漆を塗り金泥をかけた鬪體盃のこと」とする語り手の解釈によって、「作爲的に読み替えたもの」であるかのように装われた文脈形成がなされているのである。これが、「鬪體盃」における典拠運用（読み換え／書き換え）のプロセスとしては重視されるべきであろう。

また、大館次郎宗氏は、「正慶二・元弘三（一三三三）五月、新田義貞とともに新田莊で鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、武蔵国小手差ヶ原の合戦を経て、極楽寺切通口の大將として鎌倉を攻めた。しかし腰越の辺りで大仏貞直の近習本間山城左衛門の郎等と差し違え、討死した」という人物である。『太平記』にも登場するこの大館次郎宗氏の存在は、物語られる鎌倉の必然性を作り出しているといっても過言ではない。確かに、主人公である高野蘭亭、舞台となる鎌倉、そして怪異の原因となる大館次郎宗氏と、物語の主要な枠組みは『笈埃隨筆』にそろっている。とはいえ、『笈埃隨筆』のみが『鬪體盃』の典拠になっているわけではない。高野蘭亭に関する事項、大館次郎宗氏と怪異および鎌倉との連関も、複数の典拠の総合によって成り立つ。そこで、小説内の蘭亭が大館次郎宗氏の墓暴きに向かう場面をあらためて読み直してみたい。

『鬪體盃』では、『信長記』を榮女に読ませてから一カ月ほどのち、弟子とともに遊びに来ていた秋山玉山を誘い、蘭亭は深夜に極楽寺へと向かう。蘭亭の住む「円覚寺のほとりの瑞麓山の下にいとんだ草堂」から、「巨福呂坂を越えて鶴ヶ岡八幡宮の前に出、さらに若宮大路からまっすぐ由比ヶ浜の方角をめざし」、「下馬橋から右に折れて長谷小路」を進んでいくルートである。少なくとも、蘭亭が移動

した行程をすでに著している文献は『蔵書目録』中に見られない。黙して歩き続けるなか、「極楽寺の切通しにさしかかったとき」に初めて玉山は目的地が極楽寺であると蘭亭に知らされる。そして、その理由を「うむ。ほかでもないが、じつは大館次郎宗氏の墓を見つけ出したいと思ってね」と蘭亭は述べ、続く玉山との対話が次のように展開されている。

「大館次郎宗氏。あの『太平記』に出てくる新田義貞一門の部将のことか。」

「その通り。」

「おれのうろおほえの記憶によれば、たしか大館次郎は元弘三年のいくさのとき、義貞よりも一足はやく極楽寺坂から鎌倉へ攻め入ろうとして、迎え撃つ北条方の兵とはげしく戦った末、武運つたなく討死したのではなかったかな。」

「その通り。うろおほえどころか、よくおほえているじゃないか。」

「稲村ヶ崎の浜の近くに、このあたりで十一人塚と呼ばれている古い石塔が立っている。伝説によれば、これが大館次郎主従十一人を葬った墓だといわれているがね。」

「いや、それはちがうな。十一人塚はおそらく無名の兵の墓だろう。おれがしらべたところでは、大館次郎の墓はかならず極楽寺の裏山にある。極楽寺には、大館次郎が討死のみぎり所持していたという、鞍やら鎧やらのごとき遺品ものこっているそうさ。」

語り手による叙述がなく、登場人物ふたりの対話のみの進行となっているため、典拠の検討をするにしても、『笈埃随筆』の役割とは異なる問題を孕む。まず、「あの『太平記』に出てくる」「おれのうろおほえの記憶によれば」「稲村ヶ崎の浜の近くに、このあたりで十一人塚と呼ばれている古い石塔が」と話しているのは玉山である。彼のことばはかなり説明的であろう。大館次郎宗氏が何者かを示す辞書的な解説であるかのようだ。このうち、十一人塚に関する「伝説」を、蘭亭はきっぱりと否定し、「大館次郎の墓はかならず極楽寺の裏山にある」と断言している。その根拠は、「極楽寺には、大館次郎が討死のみぎり所持していたという、鞍やら鎧やらのごとき遺品ものこっているそうさ」という情報にある。

蘭亭は、大館次郎宗氏の墓の特定に関して「苦心して古文書あれこれを読みあさって」というが、作中で明確な情報源が開示されて



いない以上、玉山とともに彼らの知識が何から得られているかは判然としない。近世期の知識人である蘭亭・玉山が、『太平記』に目をおしていたと解しても不自然ではないだろう。だが、物語を動かす契機となっている「遺品」の情報は、『太平記』はもちろん、『笈埃随筆』にも触れられていない。この蘭亭の発言の背後にあるのは、『新編相模国風土記稿』であろう。「新編相模国風土記稿」は、『新編相模国風土記稿』とあり、村里部鎌倉郡卷之二十九 ○極楽寺」の項目には、「鞍一口 大館次郎宗氏所持の具と云ふ」「鐙一口 是も宗氏の所持と云ふ」とあり、『太平記』卷一〇「稲村崎成干潟事」冒頭における大館次郎宗氏の討死を参照したうえで「されば此時宗徒の郎等など此二品を當寺に寄納せしにや<sup>②</sup>」と記されている。なお、『蔵書目録』から、『新編相模国風土記稿』は『日本随筆大成』と同じ書棚にあることがわかる。高野蘭亭と、大館次郎宗氏、鎌倉との連なりは『笈埃随筆』と『新編相模国風土記稿』に基づくといえるだろう。

一方、玉山の話す説明的な内容は、「うろおぼえの記憶」として語られる大館次郎宗氏の最後にいたるところまで、おおむね『太平記』卷一〇「稲村崎成干潟事」と一致している。しかし、十一人塚に関する記述は『太平記』にはない。たとえば、一六七二（延宝二）年から編纂され始め、一六八五（貞享二）年に完成したとされる『新編鎌倉志』卷之六には、十一人塚について「里民傳へて、昔し新田義貞の勇士十一人、此処にて討死したりしを、塚につきこめ、上に十一面観音堂を立たる跡なりと云ふ。義貞の勇士十一人、未考也。昔より此濱邊は戦場なれば、いずれの人をか云傳へたる。不審<sup>③</sup>」とある。ここでも、大館次郎宗氏の名は挙げられていない。

一九〇二（明治三五）年に佐藤善次郎は、極楽寺から稲村ヶ崎のほうへ進めば、「日蓮袈裟掛松」があり、そこを過ぎて「少しく進めば左に大館宗氏主従十一名の墓と題せる碑あり<sup>④</sup>」と明記している。大館次郎宗氏と十一人塚を結び、「新編鎌倉志」には見られない言説である。いつ頃から十一人塚が大館次郎宗氏の墓と同定されたのか、正確なところは不明だが、少なくとも明治以降はその認知があるようだ。一九三一（昭和六）年三月には、鎌倉町青年団によって大館次郎宗氏の墓とする十一人塚の史跡が建立された。十一人塚と大館次郎宗氏との結び付きは、数々の資料等の検証を経て得られた、かなり近代的な認識ではないのだろうか。『新編鎌倉志』は「鬪饅盃」内の時間（一七五六年）と一〇〇年近い開きがあるものの、これが近世期の鎌倉に流通した伝承であるとするならば、玉山の発言は一種のアナクロニズムであろう。むしろ、玉山の解説を否定する蘭亭のほうに時代が即している。鎌倉は作家自身の生活圏でもあったのだから、十一人塚を大館次郎宗氏の墓とする玉山のような認知は一九三二年に建立された史跡に起因しているのかもしれない。高野蘭亭・大館次郎宗氏・鎌倉（特に極楽寺）を関連付ける「鬪饅盃」の記述は、時代の整合性を問わず、現代の認知がふまえられた、典拠の複合に

よって成り立っているとも考えられるだろう。

端的にいえば、複数の典拠を重ね合わせた創作によって、「髑髏盃」の〈鎌倉〉はその場所に固有の歴史と事物が際立たされているのである。そこに加えられる怪異の発生もまた、そういった〈鎌倉〉の形成と無関係ではない。

### 三、怪異の文脈と鎌倉

「髑髏盃」には、大館次郎宗氏を軸として三つの怪異が発生する。ひとつ目は、「天狗つぶて」、ふたつ目は、大館次郎宗氏の髑髏で作られた盃で酒を飲んだ栄女から産まれ出た「小さな異様なもの」、三つ目は、それに噛まれた高野蘭亭が死の間際に見た天狗との一件である。これらは、大館次郎宗氏の墓暴きに端を発する、一連の怪異と捉えられる。

最初の怪異となる「天狗つぶて」は、極楽寺の山門にいたり、「元弘の戦乱のころに討死した、名のある南朝の忠臣の髑髏」で盃を作るために、「大館宗氏の墓をあばいて、その髑髏をせひとも手に入れたいと念願しているのさ」と蘭亭が話した直後に発生する。「突然、どこからか大小の石がばらばらと飛んできて、頭上の屋根をゆるがすばかりに落ちかかった」というこの現象を、蘭亭と玉山は「天狗つぶて」と呼んだ。「天狗つぶて」は、「天狗が投げるといつつぶて。どこからともなく飛んでくるつぶて」と『日本国語大辞典』第二版第九卷（小学館、二〇〇一・九）にも載っている怪異である。「天狗つぶて」について、「山ではむかしからよく知られた現象らしい」と述べた玉山は、「おれの郷里の熊本でも、そんなはなしはよく聞いた。もし石にあたれば、かならず病むともいう」と続けている。実在の秋山玉山の出身地は確かに熊本である。<sup>15</sup>しかし、「もし石にあたれば、かならず病む」という「天狗つぶて」の特徴は、熊本ではなく「豊後杵築」（現・大分県杵築市）で知られた話となる。これも、『笈埃随筆』において「豊後杵築」生まれの「佐伯玄仙」の逸話として紹介されている。<sup>16</sup>蘭亭の髑髏盃と同じ『笈埃随筆』中のエピソードであるのだから、澁澤も目にしてははずだ。小説の内容に合わせた、典拠の書き換えといったところだろう。

とはいえ、「天狗つぶて」自体が、日本全国で広く知られた現象である。大分県固有の怪異というわけではない。鎌倉でも、「元弘二年の春の頃」に「鎌倉の街に、天狗礫といひふらし、貴戚士民の門をえらばず、夜毎につぶてうちものあり。又夜行するもの天狗にあへば

かならず蹴殺され、衣服を剥がる、とて、黄昏よりさらに往来たへ、士民戦慄て舌をふるひ、鎌倉中おだやかならざりけり」という話が、岸誠之『桑陽庵一夕話』中の「光林房律師賊首を激して味方に招く事」に記されている。<sup>67</sup>ただし、こちらは天狗の正体が「小冠者」を頭目とした若者らであったという内容になるため、「天狗つぶて」そのものの事例とは呼びがたい。ともあれ、一三三二（元弘二）年にはすでに「天狗つぶて」は鎌倉のなかで周知された怪異ではある。

知っているからこそ、「天狗つぶて」に玉山は恐れを抱くが、蘭亭は墓暴きを敢行しようと極楽寺の境内に入っていく。蘭亭がまっすぐに進んでいく極楽寺の「裏山」は、「ひとのめつたに足を踏み入れない裏山にはいくつとなく墓がある。墓といっても、当時のそれは鎌倉石の山腹にうがった横穴式の谷倉である」「だれの墓かを特定するのは極度にむずかしい」と語られている。そのあと、「天の一角で雷鳴がとどろき、青い稲光りが一すじ闇をつんざいて、まっすぐ寺の裏山のあたりに落ちかかる」とされ、墓暴きの完遂となる。文脈上、大館次郎宗氏の墓も「谷倉」ということになろう。「谷倉」（一般的には「やぐら」と表記）は鎌倉における中世期の墳墓である。極楽寺周辺でも、極楽寺旧境内・馬場ヶ谷やぐら郡や極楽寺やぐら郡などが、近代以降に発掘・調査されている。「鬪髑髏」内でも「だれの墓かを特定するのは極度にむずかしい」と語られているように、現実の「やぐら」も誰の墳墓かを確定できないものが多数存在する。鎌倉を舞台とするならば、在所不明の墓として「やぐら」が選ばれるのは必然的な帰結であろう。「裏山」というのだから、極楽寺旧境内・馬場ヶ谷やぐら郡であろうか。いずれにせよ、極楽寺の「裏山」に大館次郎宗氏の墓があるととして「谷倉」と語られる点は、鎌倉という場所の特性がふまえられた創作でもある。

大三輪龍彦『鎌倉のやぐら』（かまくら春秋社、一九七七、四）では、「やぐらは旧鎌倉を取り囲む丘陵には驚くほど密集していて、一度でも鎌倉の山沿いや山中の小径をたどったことのある人は、一つや二つ必ず見ているにちがいない。ところが、鎌倉の端から一歩でも外に出てしまうと、急激にその数が減ってしまつて、ほとんど我々の目に触れることはなくなつてしまふ」と、「やぐら」が鎌倉に独自の墳墓である点が強調されている。さらに、本書の「鼎談 やぐらの謎をさぐる」（大森順雄・永井路子・大三輪龍彦）では、「やぐら」を土で塞ぎそこに家を建てたところ、その並び数軒の家人の夢に武士が出て来て水を求めたという怪異も語られているのである。「やはりやぐらには怨霊があるんでしょかね」（大三輪）、「我々は七百年の怨霊に対して、何らかの精神的な作法をとつておかねばいかんと思ふのですよ」（大森）と交わされているように、武士などの墳墓であるがゆえ、「やぐら」と怪異の関係性は根深い。第一節で触れた、

神沼三平太『鎌倉怪談』にも「やぐら」に関する怪談は複数掲載されている。「やぐら」と武者の怪異は、近年の怪談文脈のみならず、「髑髏盃」発表以前から鎌倉で共有され続けてきたのである。その意味でも、大館次郎宗氏、極楽寺、「谷倉」という怪異の発生を導いていく「髑髏盃」の構成は、鎌倉という場所の必然性に依拠しているといえるだろう。

このような場所に付随する必然性は、怪異の発生がありえるかもしれないという予感を読者にもたらすものでもある。たとえば、現代の「実話怪談」においては「怪談とは作家がゼロから創作したものではなく、必ず誰かの体験談であるということ。体験者が特定できるかどうかはともかく、絶対的に「本当にあった怖い話」に他ならないのだ、という意識の徹底<sup>(18)</sup>」が求められているという。ここでいう「本当」とは、いわば「リアリティ」の生成であろう。高田敦史は、ホラー映画や怪談における「ドキュメンタリー風の演出」について「おそらくここでの「リアリティ」とは、描かれている出来事を現実にも起こりうることとして描き、登場人物を自分の身近にも存在しうる人物に見せるということだろう<sup>(19)</sup>」と述べている。殊に現代の怪談文脈では、「体験者」の存在や「実話」であるという演出・前提が、読者の日常・現実と連続する可能性を予感させる「リアリティ」の生成として要求されているようだ<sup>(20)</sup>。

こういった、実際にありえるという予感（一種の「リアリティ」）の生成は、演出や前提、「体験者」の存在だけではなく、場所によっても創造しうる。怪談作家の黒木あるじは、「怪異の背景に「地域の歴史や文化」が絡んだ途端、「偶然」は「必然」へ姿を変ええる。「あの場所なら、なにが起きても不思議ではない」と奇妙な説得力を持ち、「その場所だから起こり得たのだ」と謎の理由づけがなされる。きわめて個人的な体験であった「怪異との遭遇」は、「土地」という付加価値を得て、物語になる<sup>(21)</sup>」と語る。怪異が起きても不思議はないと感じさせる「奇妙な説得力」は、「地域の歴史や文化」によって生み出される。「髑髏盃」でいえば、極楽寺近辺の鎌倉および「やぐら」と、大館次郎宗氏の史実である。場所に根差したこのような物語が、「天狗つぶて」等の怪異の発生を、「起きても不思議ではない」という予感（一種の「リアリティ」）として成り立たせている。現代の怪談に通底する怪異発生<sup>(22)</sup>の構造は、宝暦期を背景とした「髑髏盃」の（鎌倉）からも十分に読み取れよう。

「髑髏盃」では、蘭亭が大館次郎宗氏の墓暴きを終えた一年後、「小さな異様なもの」と天狗の一件と、さらにふたつの怪異が続く。「小さな異様なもの」については、残念ながら現時点では典拠不明であり、今後も調査を継続していく必要がある。一方、天狗とのやり取りは、蘭亭の失明に関わるエピソードを含んでおり、おそらくは『護園雑話』を典拠とする。蘭亭は「この井戸をおぼえているか」と

天狗に問われ、それは「まぎれもなく小田原町で魚問屋をいとなんでいた父の邸の庭にあった井戸にほかならなかった」と語られる。この井戸のくだりは、「一六七歳の」蘭亭が自宅の「小座頭」を「虫が好かなかった」ため、「母の針箱に金子三両あるもの」を「小座頭の道具の中に入れ」、結果、蘭亭の「両親の怒り」を買った「小座頭」が「鬱憤して、主家の庭の井戸に身を投げて死んだ。蘭亭が目を見出したのは、この日からだ」という内容になる。これと同様のエピソードが、『護園雑話』内にある。<sup>22)</sup>

ただし、『護園雑話』に天狗は出てこない。『護園雑話』は、蘭亭が失明した原因として「小座頭」との出来事を紹介しているのみである。「鬪鬩盃」では、「天狗つぶて」を契機とした一連の怪異として、天狗が登場し井戸を促す内容に『護園雑話』内のエピソードが置き直されている。物語内の蘭亭は、「鎌倉の草堂」に倒れたままである。失明にいたる記憶と日本橋小田原町という場所は、超越的に語られつつも、「鎌倉の草堂」の時間・空間と同時に存立し、天狗の存在を媒介にして〈鎌倉〉における怪異の延長線上に接続される。すなわち、鎌倉に由来した「天狗つぶて」と天狗というふたつの怪異の連関が、「小座頭」の怨念ともいえる新たな怪異を小説内の蘭亭の身に起こりうる事象であるかのように見せているのである。

「鬪鬩盃」において、高野蘭亭、鎌倉、怪異の三つは、『笈埃随筆』を元とした構成ではあるが、『新編相模国風土記稿』や『護園雑話』など複数の典拠を総合しながら、とりわけ鎌倉という場所の独自性が前景化するように描かれていると読める。そして、場所に固有の歴史や文化と怪異を連携させる物語の形成は、現代における怪談の文脈へと「鬪鬩盃」の読みを開いてもいた。特に、「谷倉」を怪異の発生源とする点は、第二節でも確認したような鎌倉の現代性を喚起している。確かに、小説発表当時における「現在」の鎌倉と「鬪鬩盃」の〈鎌倉〉とは差異がある。しかし、こういった読みを念頭に置けば、それが、どのようになされ、いかなる距離を表しているかが、やはり重要であろう。明らかな乖離と即断するわけにはいかない。そこで次に、「鬪鬩盃」の〈鎌倉〉の特性を、視点を変えて小説が発表される一九八〇年代前後の鎌倉から問い直してみたい。

#### 四、場所のアイデンティティと鎌倉

雑誌「Non-no」一九七三年五月号で「古都・鎌倉」という特集が組まれた際、鎌倉在住の文士として澁澤龍彦のコメントが掲載された。

そこで澁澤は、「ぼくにとつて鎌倉ってなんだろう…ウーン…そう、ノスタルジーの町だな。以前は由比が浜には松林があつて、その中を歩いていくと、だんだん海が近づいてきて…豊島屋のアイスクリームを食べるのが、子どもころの楽しみだったなあ…」と語っている。「Non-no」の特集は、「徹底ガイド」と掲げられ、鎌倉の地図、「ノンノが選んだ鎌倉4つのコース」、有名な寺社仏閣や当時の人氣の飲食店の紹介等の観光案内である。まさに澁澤が忌避した特集でもあろう。

「私は現在の騒然たる鎌倉については、とても書く気がしないのだ。書くならば、私の記憶のなかに美しいイメージとして残っている、静かな昔の鎌倉について書きたいと思う」とも、澁澤はのちに語っていた。澁澤は、幼少期（一九三〇年代）にも、鎌倉に住む伯父の家に遊びに来ている。そのような「記憶のなかの美しいイメージ」（ノスタルジー）と対置される「現在」の鎌倉とは、澁澤にとつてはやはり観光と直結したものであるのだろう。一九八〇年代以降の読者からすれば、鶴岡八幡宮から若宮大路を経て由比ヶ浜方面へと向かう「髑髏盃」の移動ルートは、いかにも鎌倉らしいわかりやすさがある。場所に根差した歴史や文化を物語内容とする「髑髏盃」は、作家主体で考えれば、いわゆる観光スポットとしての鎌倉との断絶や、ノスタルジーを語ろうとする作家自身の姿勢との呼応とも読まれかねない。

とはいえ、そもそも鎌倉は古くから観光地化されている。近世期にも、十返舎一九『方言修行 金草鞋 江之島鎌倉廻』（錦森堂、一八三三）のような観光案内に類する刊本はある。しかし、澁澤が一九三〇年代のノスタルジーを語っている以上、着目すべきは、経済的な発展と交通網の発達が観光地化を進めた、戦後以降の鎌倉であろう。一九五〇年代には、東京駅を出発し、北鎌倉駅から円覚寺・建長寺・鶴岡八幡宮・鎌倉大仏・江の島まで、鉄道やバスを利用した詳細な「鎌倉・江の島一周プラン」が提案されている<sup>24</sup>。一九七〇年には、国鉄による「デイスカパー・ジャパン」キャンペーンも始まる。先に見た「Non-no」の特集も合わせ見れば、澁澤の嫌悪した観光地・鎌倉のイメージが戦後以降に顕著となっていく過程は想像にかたくない。鶴岡八幡宮に接する小町通りの観光地化および観光客の増加も、一九八〇年代から始まるという<sup>25</sup>。試みに一九八二年二月発行の『朝日旅の百科 鎌倉』（朝日新聞社）を見ると、巨福呂坂切通について「休日には八幡宮あたりから渋滞して車の排気ガスが立ちこめていて、あまり楽しいところではない」と、鶴岡八幡宮近辺の混雑は辛辣なことばで表されている。鶴岡八幡宮のような著名な観光エリアに対する観光客の増加は、メディアを通じて注意喚起すらされているのである。

戦後以降、メディアによる観光案内の増加は鎌倉への集客を確実に高めた。このような観光と場所の関係についてエドワード・レルフは、「場所に対する偽物の態度は、観光にみられるほどはっきり現れているものはない」「観光においては、場所に対する個々人の判断は、ほとんどいつも専門家や一般世間の意見に包摂されてしまっており、観光という行為とその手段が、訪れる場所よりも重要になっている」と述べている。レルフは、「偽物の態度」とは「没場所性」を直接間接に助長するたぐさんのプロセス、あるいはもつと正確にはメディアを通じて伝えられる」とし、「没場所性」とは、どの場所も外見ばかりか雰囲気までも同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまうほどまでに弱められてしまうことである」とする。メディアの喧伝に触発された観光によって、没場所性が露わとなり、場所のアイデンティティが弱化するという構図は、観光資源化がより推し進められていった戦後以降の鎌倉にも当てはまっていよう。ただこれは、鎌倉のみならず、メディアにしばしば特集されるような著名な観光地の宿命でもある。過剰な観光客の集中は、その場所へ行くことの目的化の現れであり、まさに「どの場所も外見ばかりか雰囲気までも同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまう」状況である。

一方、レルフが注目する場所のアイデンティティとは、「単なる地名辞典の住所とか地図上の点であるよりは、むしろ私たちの場所経験に影響を与えまたそれによって影響されるような、場所経験の基本的特性」であり、「場所間の異同を認識することだけではなく、違いの中に共通性を確認するというもつと基本的な行為」「個人や集団がその場所に対して持つアイデンティティであり、とくに彼らが場所を「部内者」として経験するか、あるいは「部外者」として経験するのかわり」とされる。また、レルフは、「静的な物質的要素、人間の活動、そして意味は、場所のアイデンティティの三つの基本的な要素を構成する」ともいう。自然や建造物、人の営みや行動、そしてその場所にいかなる意味を見出すかが、場所のアイデンティティを作り上げる。内部で生きる人間（「部内者」と、外部から接触する人間（「部外者」とでは、とりわけ意味に差異が生じるだろう。「現在」の鎌倉に対する澁澤の発言は、ひとりの「部内者」による場所のアイデンティティの表出にほかなるまい。

これを「髑髏盆」に置き換えれば、〈鎌倉〉に対する登場人物の認識・見解や語り手の言説が、場所のアイデンティティを構成する諸要素となる。蘭亭は、「鎌倉は円覚寺のほとりの瑞鹿山の下にいとなんだ草堂」で生活し、大館次郎宗氏の墓暴きに向かうときは、

玉山に「鎌倉はおれの縄張りだから」と話していた。盲目の蘭亭が迷うことなく極楽寺を目指し歩いていくさまを、玉山は、「あいつ、ふだんから鎌倉をよつぽどあるきまわっている」と心の中で評している。極楽寺の境内に入り込んだ蘭亭は、「まっすぐ境内を横ぎつて、さながら勝手知ったるものごとく、寺の裏山のほうをめざしてあるき出した」と語られもする。このような蘭亭は、明らかに「部内者」である。巨福呂坂切通・鶴ヶ岡八幡宮・若宮大路・下馬橋・長谷小路を経て極楽寺へといたる道筋は、「現在」ではよく知られている。そこを「よつぽどあるきまわっていると見える」とされるように進んでいく様子は、蘭亭が北鎌倉近辺のみならず、広く鎌倉自体の「部内者」であるという例証にもなる。一方の玉山は、蘭亭のところに遊びに来る者であり、彼の感想を見ても「部外者」である。

語り手は、焦点化の対象を適宜変えるため、場所に対するその立ち位置を限定しがたい。ゆえに、語り手は場所に対する内部／外部いずれの意味・価値をも了解しうる存在ではある。しかし、登場人物の誰かに焦点を当てるのではなく、無人称で語られた言説は、語り手自身の立ち位置をより明確にしよう。たとえば、蘭亭らが極楽寺の山門に到着した際に、「耳をすませると、瑞鹿山の草堂に毎夜のごとく聞こえてくる、あのトラツグミの怪奇な声がここにも聞こえてくる。とすると、時刻はとうに三更をすぎているにちがいない」と語られている。ここでいう「あのトラツグミの怪奇な声」とは、蘭亭らが大館次郎宗氏の墓暴きに出発する前の場面で、栄女が『信長記』の音読を終えたところでの、「すでに三更をすぎて、しんしんたる夜気が草堂に迫り、近隣の山々では雌雄のトラツグミがしきりに鳴きかわしていた」という箇所を受けたものとなる。いずれも、人称主語が用いられていない文で構成された箇所である。語り手は、すでに「三更」（二三時頃〜〇時半頃）を過ぎる時刻にトラツグミの声を聞いている。だから、その声が次に聞こえたとき、「時刻はとうに三更をすぎているにちがいない」と語り手は判断できる。「三更」を過ぎるとトラツグミが鳴くという経験に則った、自然の時間概念の叙述は、語り手が〈鎌倉〉の「部内者」に等しい立場にあることを強く印象付ける言説であろう。

高野蘭亭の認識や語り手の言説から、「髑髏盃」の〈鎌倉〉は「部内者」による場所のアイデンティティを基本にして描かれているといえよう。大館次郎宗氏の墓所について、解説めいた一般的な認識を述べた玉山の発言内容は、蘭亭に否定されていた。「部外者」となる玉山は、「部内者」による場所のアイデンティティを引き立てる役割を果たしている。蘭亭は、〈鎌倉〉に生き、大館次郎宗氏というそこに固有の歴史と極楽寺について、「苦心して文書あれこれを読みあさって」いた人物である。このような「部内者」から創出された



〈鎌倉〉が、一九八〇年代であれば、誰もが知り、観光地として想像しやすい鎌倉の中心的な地理的空間の上に重ねられているのだ。

「部内者」と「部外者」との場所に対する意味付けの相違が、「髑髏盃」の〈鎌倉〉が示す、「現在」の鎌倉への距離となる。観光資源化された鎌倉は「部外者」による鎌倉の一面にすぎない。前節まで見てきたように、「髑髏盃」では、歴史・文化・怪異という場所に根差す物語が〈鎌倉〉を現代へと開いていた。「部内者」を中心にして生み出されたその意味と価値は、「現在」という時間にあっても変わらない。つまり、「髑髏盃」は、「現在」の鎌倉を「部内者」の観点から上書きしていく、その場所のアイデンティティによって普遍的な〈鎌倉〉の姿を写し出していると読めるのである。

## 五、「髑髏盃」における〈鎌倉〉

顧みれば、「部内者」の立ち位置を暗示したトラツグミの鳴き声は、「髑髏盃」内で繰り返して語られていた。栄女による『信長記』の音読後の「近隣の山々では雌雄のトラツグミがしきりに鳴きかわっていた」、極楽寺の山門の下に到着した際の「あのトラツグミの怪奇な声」、蘭亭が大館次郎宗氏の墓暴きを完遂させる直前の「雌雄のトラツグミがひとときわ物さびしい笛のような声」、最後は蘭亭の死が語られる前に栄女が思い返す「おかしいな。トラツグミがこんなにはやく鳴くなんて。あれはもともと夜もふけてから鳴く鳥のはずなのに」である。古くは鶴や鶴鳥とも呼ばれたトラツグミは、夜中に細い声で鳴くために気味悪がられ、不穏や怪奇の象徴と目されてきた。「髑髏盃」でも、トラツグミの鳴き声が物語内容に応じる形で不穏や怪奇の予兆として機能している。ただし、トラツグミの鳴き声は、澁澤龍彦にとつては鎌倉と密接な響きでもあった。

澁澤の死後、妻の龍子は、「彼が机上で愛用していた新潮社のカレンダーの一九八七年四月六日のところに「風呂でトラツグミ 聞く」として<sup>30)</sup>あると明かしている。澁澤龍子によれば、「澁澤は生前、ウグイス、ホトトギス、トラツグミ、それにヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシなどの初音を聞いた日を、忘れずに書きとめて<sup>31)</sup>いた。北鎌倉の自宅近辺から聞こえる野鳥などの鳴き声を、澁澤は楽しみにしていたのだろう。トラツグミの声は、澁澤の生活圏という空間を想像させる音声（「部内者」の認知）でもある。澁澤の『東西不思議物語』（毎日新聞社、一九七七・六）には「トラツグミ別名ヌエのこと」と<sup>32)</sup>という一篇があり、また、「神奈川新聞」一九八六年

二月二二日の「かながわ人」欄に掲載された澁澤の談話（「トラツグミ」）では、自身が「円覚寺の裏山」に住んでいること、「春になるとトラツグミが鳴く」ことが話され、「雌雄が交互に「ヒュー」「ヒュー」とそれは寂しい声で鳴くんですよ。インスピレーションを刺激されますね」とまで語られている。現代の読者は、澁澤龍子の発言や『東西不思議物語』等を知れば、トラツグミの鳴き声が響く場所に、作家の生活圏を重ね見ることもできよう。トラツグミの鳴き声は、怪異の発生を暗示するとともに、現実的にも「部内者」<sup>インサイダー</sup>の立場からは容易に想像できる鎌倉のアイデンティティでもあったのである。

「髑髏盃」では、『笈埃随筆』『新編相模国風土記稿』『護園雑話』など、物語内容の中核をなす典拠が、鎌倉を舞台とする必然性をより鮮明に表す文脈へと置き直されていた。こういった典拠利用が示す文脈と同じく、怪異も鎌倉と密接な関連性を際立たせるものであった。そしてそれらは、「部内者」<sup>インサイダー</sup>による場所のアイデンティティを中心に語られ、普遍性を備えた〈鎌倉〉として創出されていた。現実的な鎌倉と、典拠に表されていた鎌倉とは、高野蘭亭の物語および怪異の発生源に適した〈鎌倉〉へと統合されているのである。

このような〈鎌倉〉の描かれた方は、失明に対する蘭亭の認識にも関わりと考えられる。「髑髏盃」において、「目が見えない」という蘭亭の状態は「自分」という一人称を用いて次のように語られている。

なるほど自分は目が見えない。ただし自分の見えない目のまぶたの裏には、あらゆる物の本当のかたち、本当の色がまざまざと映って見える。それは現実の物のかたち、物の色とは大いにちがうかもしれない。もしかしたら自分の内部から出てきたものかもしれない。それだつて一向にかまわない。少なくとも自分にとっては、自分の内部から出てきた物のかたち、物の色こそ本当の現実なので、その現実から自分なりのコレクションを作り出していればよいからだ。いつから自分のまぶたの裏には、こんなふう<sup>インサイダー</sup>に物のかたちや色がまざまざと映って見えるようになったのか。それはもちろん、自分が十七歳で失明したときからにきまつている。いわば失明することによって、自分は自分の内部に無限のコレクションの対象を発見することができるようになった。自分の内部が現実とひとしいコレクションのための宝庫になった。これを幸運といわずして何とおおうか。

蘭亭を示す「自分」という一人称主語で語られながら、「コレクション」という語が用いられているのも、十一人塚に対する玉山の

発話と同じように、読者に現代的な理解を想起させるアナクロニズムであろう。ただしここで注視すべきは、小説内の蘭亭が「幸運といわずして何といおうか」と失明を肯定していく過程である。「見えない目のまぶたの裏には、あらゆる物の本当のかたち、本当の色がまざまざと映って見える」とし、その「自分の内部から出てきた物のかたち、物の色こそ本当の現実」だと、蘭亭は認識していく。「天狗つぶて」が起こり、玉山から大館次郎宗氏の墓暴きを止められた蘭亭は、「おれは盲いているから、石つぶてなんぞは見えやしない。おれの目に見えないものは、おれにとっては存在しないも同然だ。かえって目あきこそ、つまらぬものを見るがゆえに、怪異にまどわされもする」と嘯いた。「本当の現実」は自分の内部から立ち上がってくるというのならば、周りが何をいおうと、「まぶたの裏」に見えていない「物のかたち、物の色」を認められるはずはない。目前の現象や情報に左右されるような「目あきこそ、つまらぬものを見るがゆえに、怪異にまどわされもする」とは、むしろ至言であろう。

蘭亭にとっては自分の内部で感じ取られるイメージこそが、「本当の現実」である。「見えないもの」は「存在しないも同然」とはいえ、「天狗つぶて」は起きているのだから外部の現象は実在している。自らの内部に立ち上がるイメージを重視する蘭亭の姿勢は、誰の目にも明らかな外部であろうと、けっして「まどわされ」ないという意志の表明である。「部内者」<sup>インサイダー</sup>による場所のアイデンティティから語られる「髑髏盃」の〈鎌倉〉と、これは近似していよう。すなわち、大館次郎宗氏の墓が極楽寺内の「谷倉」に存在し、そういった歴史と文化を起点とした天狗にまつわる怪異が発生する〈鎌倉〉は、「髑髏盃」において、蘭亭の核心を担う「本当の現実」と同等の強度をもった場所ともなるのである。

場所に根差した物語においては、そこに固有の事象をどう表すかが肝要だ。地名が用いられているだけでは、場所としての意味は機能しない。虚構化されたうえで、現実的な場所そのものとの連動、あるいは差異の生成が求められる。「髑髏盃」において〈鎌倉〉は、高野蘭亭のいう「本当の現実」に比肩する場所でもある。このような描かれ方は、典拠や内部的な経験を複合し、現実的な鎌倉が上書きされる小説の相貌に基づいている。歴史・文化・怪異の連環と、「部内者」<sup>インサイダー</sup>による場所のアイデンティティによって、「髑髏盃」における〈鎌倉〉は、時代にとらわれず、現在の認知までもが意識された拡張的な場所として成立しているのである。

注

(1) それぞれの初出は、「きらら姫」が「文藝」一九八三年八月、「ダイダロス」が「海」一九八三年一月、「護法」が「海燕」一九八五年七月、「髑髏盃」が「海燕」一九八六年四月となる。なお、「きらら姫」は『ねむり姫』（河出書房新社、一九八三・一一）に、「ダイダロス」「護法」「髑髏盃」は『うつる舟』（福武書店、一九八六・六）に収載された。

(2) 澁澤龍彦「北鎌倉の歳時記」(『ブチゼゼン』一九七二・八)

(3) 澁澤龍彦「昔と今の鎌倉」(『グラフかながわ』一九七三・五)では、「近ごろ、いろんな雑誌で鎌倉特集ということをやるところになって、私のところにもよく話を聞きにくる」「私はもう、そういう質問にはうんざりしていて、答える気もなくなっている」「昔の鎌倉はよかったが、今の鎌倉はもう駄目ですよ」と答えることにしている」と述べられている。

(4) 澁澤龍彦「鎌倉のこと」(『Tideトレフル』一九八四・四)では次のように語られている。

現在、鎌倉の町もすっかり変ってしまった。つい数年前までは、いたって静かな町だったのに、どういう風の吹きまわしか、今では行楽シーズンにどつと観光客が押し寄せてきて、鎌倉の住民はおちおち散歩もできず、車を出すこともできなくなってしまった。雑誌のグラビヤには、やれどこのお寺が結構だとか、やれどこのお店が美味だとか、やたら紹介記事が目につく始末で、古くからの鎌倉の住民は狐につままれたような気分である。

私は明月院の近くに住んでいるが、あじさいの季節には道路も押すな押すなの雑踏ぶりで、うっかり自家用車でも出そうものなら、「まあ、こんな人混みに車を取り入れるとは、なんて非常識なひとでしょう」と観光客から文句をいわれる。冗談ではない。私たちにとっては生活のための道路である。観光客に道路を占領されて、車も出せないようではたまらない。

(5) 神沼三平太「鎌倉怪談」(『竹書房』二〇二二・一〇)

(6) 近藤春雄『日本漢文学大事典』(明治書院、一九八五・三)には、「一七〇四—一七五七。江戸時代、江戸の人。名は惟馨。字は子式。号は蘭亭・東里。父勝春は百里居士と号し、俳諧の大家であった。萩生徂徠に学び、十七歳で失明した。これ以後詩に専心して、詩経以下唐明大家の作に到るまで暗誦し、その詩は服部南郭と比せられるものがあった。宝暦七年七月六日没、年五十四。著に蘭亭遺稿十卷・蘭亭先生詩集一卷がある」と高野蘭亭について記されている。

(7) 目黒将史「髑髏盃をめぐって―織田信長を端緒に」(『アジア遊学250 酔いの文化史―儀礼から病まで』二〇二〇・七)

- (8) 『藏書目録』内の記載番号は、桑田忠親校注『改訂 信長公記』が[16:04:09]、神郡周校注『信長記』上・下が[16:04:16]とある。
- (9) (7)に同じ
- (10) 『笈埃随筆』の成立について『日本随筆大成』第二期第六卷の「凡例」では、「著者が安永の初年より天明の末年まで、身を六部の姿に襲し、笈を負ひて諸国を遍歴し」「到處の勝地絶景、或は奇談珍説方言等まで、巨細に記したる漫遊記なり。未だ曾て刊行せられざる珍籍」とされている。なお、『藏書目録』では、澁澤龍彦による書き込みがある場合、それを示す「★」が書名の前に記されている。『日本随筆大成』第二期全二四卷（記載番号[4:1:01-42]）にも署名の前に「★」がある。ただし、『日本随筆大成』第二期全二四卷は全巻一括での記載であるため、第何巻のどこに書き込みがあるかといった詳細はわからない。
- (11) 福田豊彦「大館宗氏」(『鎌倉・室町人名事典』(新人物往来社、一九八五・一一))
- (12) 『新編相模国風土記稿』の成立は、一八四一年二月(天保二二年辛丑)とされる。引用は、大日本地誌大系(二三) 蘆田伊人校訂『新編相模国風土記稿』第五卷(雄山閣、一九九八・四)による。なお、『藏書目録』に記載された澁澤所蔵のものは、大日本地誌大系(二三) 蘆田伊人校訂『新編相模国風土記稿』第五卷(雄山閣、一九八〇・一一)記載番号[4:1:01-50]になる。また、『藏書目録』の『新編相模国風土記稿』第五卷には、書き込みがあることを示す「★」も付されている。
- (13) 大日本地誌大系(二四) 蘆田伊人校訂『新編相模国風土記稿』第六卷(雄山閣、一九九八・四) なお、澁澤が所蔵しているのは、一九八〇年二月刊行の大日本地誌大系(二四)『新編相模国風土記稿』第六卷(雄山閣『藏書目録』記載番号[4:1:01-6])となる。
- (14) 佐藤善次郎『鎌倉大観』(弘集堂、一九〇二・六)
- (15) 近藤春雄『日本漢文学大事典』には、秋山玉山について「一七〇二―一七六三。江戸時代、肥後(熊本県)の人。名は義・定政。字は子羽。通称は義右衛門。号は玉山・青柯」とある。
- (16) 百井塘雨『笈埃随筆』巻之一(『日本随筆大成』第二期第六卷)中の「天狗つぶて」の記述は、以下のとおりとなる。
- 佐伯玄仙といふ人、豊後杵築の産なり。今京に住めり。この人の云、国に在りし時、雉打んがため夜込みに行たりしが、友二三人銘々鳥銃携へて行けり。とある山道へかゝる所に、左右より石を投たり。既に中りつべく覚て大に驚きたる、中に能く心得たるものあり。押し静め先下に座せよと云て、言を交えず黙して居るに、夥き大石頭上に飛違ふ程なり。そのひゞきおびたゞし。暫くして止みければ立上つて行ける。心得たる友の云様、是を天狗礮と

いふ。曾て中るものにあらず。若あたりたらんものは必ず病む也。また此事に逢へばかならず狐なし。今宵帰るには道遠ければ是非なく来るといふ。果して其朝ひとつも打得ずして帰りぬとなり。

(17) 岸識之『桑陽庵一夕話』(一八四二・四)は『日本随筆大成』第二期第一三卷(吉川弘文館、一九七四・七)所収。なお、『桑陽庵一夕話』では、「極楽寺の切通しちかく林の茂より踊りいづるものあり」と天狗の登場が語られている。

(18) 吉田悠軌「怪談の深層に眠るもの」「子殺し」怪談 section2」『現代怪談考』晶文社、二〇二二・一)

(19) 高田敦史「Jホラーの何が心霊実話なのか?—実話怪談、ドキュメンタリー、心霊写真」『ユリイカ』二〇二二・九)

(20) 竹書房の「竹書房怪談文庫公式サイト」(<https://kyofurakeshoboco.jp/>) 二〇二三・九(閲覧)には、「竹書房怪談文庫は、体験者の実在するリアルな恐怖譚」『実話怪談』を中心に、毎月さまざまなホラーをお届けする唯一無二の怪談レーベルであると記載されている。

(21) 黒木あるじ「ふたたびの全国怪談 前口上」(『全国怪談オトリヨセ 恐怖大物産展』KADOKAWA、二〇一五・九)

(22) 『護園雑話』は著編者・成立年不明。『続日本随筆大成』第四卷(吉川弘文館、一九七九・一二)『蔵書目録』記載番号「二〇七」所収。蘭亭の失明については以下のように記述されている。

蘭亭十七歳にて盲目となるわけは、もと肴屋の富家の子なるが、常に十六七歳の小座頭来たるが、利根ものゆへ、家内の気に入る、往々は世話いたし遣はすべしと両親とも思居たるが、如何のことやら蘭亭と中悪くなり、殊の外蘭亭悪まれ、どうぞして出入りせぬやうにと工夫を廻らし、或時富家のこと故母が針箱に金子三両ありたるを蘭亭のいたづらに小座頭の道具の内に入をきたり。なにか尋られたるに知れず、然らば召仕の道具を改めんと云に成ければ、小座頭は何の心もなければ速に改めさするに、其道具の内より出たり。因て其小座頭を呼び、其方に於ては此の如き悪行は有まじきものと思ひ、往々は世話をもして身の片付をつけやるべしと思ひしに、不届なる悪なりとて出入を止められたるが、鬱憤して井戸に入て死たり。其死せし日より蘭亭目をやみ終に失明せり。因て是は彼の座頭の一念なりとて治療のことをす、むる人あれども肯はずとなり。此のこと深く秘したるが老年に成て咄たりと春山が咄なり。

また、同書には「蘭亭が父は日本橋小田原町の御魚屋なり。豪富にして芭蕉の門人となり俳諧をよくす」と、「鬪髑髏」における蘭亭の父や生家に関する記述と一致する内容の箇所もある。

(23) (3)に同じ。なお、(2)「昔と今の鎌倉」も澁澤の記憶のなかの「昔」の鎌倉(ノスタルジー)を語る文章となっている。

- (24) 日本旅行研究会編『温泉と旅の計画事典』(緑園書房、一九五五・四)では、「史蹟にみちた古都鎌倉・江の島」と題し、「鎌倉・江の島一周プラン」のほか、極楽寺や七里ヶ浜などの細かな紹介も掲載されている。
- (25) 随尚華「商店街の観光地化によるアイデンティティの変化と商店街住民の対応―鎌倉市小町通り商店街を事例として」(『お茶の水地理』二〇二〇・五)
- (26) エドワード・レルフ『場所の現象学 没場所性を越えて』(高野岳彦・阿部隆・石田美也子訳、筑摩書房、一九九一・九)
- (27) (26)に同じ。
- (28) (26)に同じ。
- (29) (26)に同じ。
- (30) 澁澤龍彦『澁澤龍彦との日々』(白水社、二〇〇五・四)
- (31) (30)に同じ。

(32) 澁澤龍彦「トラッグミ別名ヌエのこと」(初出は「毎日新聞」一九七六・五・二)では、「私は北鎌倉の円覚寺の裏山に住んでいるが、じつは、もう数年前から、毎年のように、この季節にトラッグミの鳴声を聞いているのである」「私は人の寝静まった夜中に原稿を書いているので、とくに気がつくのかもしれないが、トラッグミは丹沢の山奥ばかりでなく、鎌倉の山にもいるのだということ強調しておきたい」と語られている。円覚寺の近辺、深夜という時間、鎌倉に  
いるという強調は、トラッグミの鳴き声を聞くという経験を、「部内者」による場所のアイデンティティとして語る姿勢と捉えられよう。

\*澁澤龍彦作品の引用はすべて河出書房新社版『澁澤龍彦全集』全三二巻別巻二(一九九三・五)―一九九七・六)による。なお、本稿は、澁澤龍彦研究会第一七回(二〇二三年三月一八日、オンライン)での口頭発表「怪奇現象が生み出される場所―澁澤龍彦「髑髏盆」における鎌倉」に基づいている。研究会において、貴重なご教示をいただいたことに感謝を申し上げます。